

# 雪まつり60年の歴史を振り返る

1950(昭和25)年

【第1回】

市内の中学生と高校生が6基の雪像を大通西7丁目に制作。約5万人の市民が会場を訪れた。



第1~8回ポスター

第1回

雪像のほかにもさまざまなイベントが催され、野外でのダンスや映画、ドッグレースなどが人気を博しました。

級友たちと作った初めての雪像

第1回の雪像制作に参加した  
たはら どうたるう  
田原 藤太郎さん  
(当時北辰中学校2年)

北辰中学校が制作した  
「セザンヌのモニュマン」



雪像なんて作ったこともなかったので、担任だった美術の先生の指導の下、雪を積み上げて固め、削りながら作りました。物もない時代でしたので、スコップとバケツを自宅から持ち寄り、クラスメートと楽しみながら暗くなるまで作業したことを、雪まつりの季節が来るたびに懐かしく思い出します。



1953(昭和28)年

【第4回】

高さ15メートルの大雪像「昇天」が作られ、現在の大雪像の先駆けとなる。

1955(昭和30)年

【第6回】

自衛隊が参加し、大規模な雪像作りに挑戦。高さ10メートルのマリア像「栄光」を制作。



第4回

「昇天」は、伏見高校(現札幌工業高校)の生徒によって作られました。大きい雪像を作り、訪れる人を喜ばせたいとの思いから、学校を挙げて延べ1,000人の生徒が雪像作りに参加しました。



あまりの大きさに、訪れた市民を驚かせた大雪像「昇天」

1959(昭和34)年

【第10回】

初めて全国のテレビ、新聞で紹介され、翌年からは「札幌の雪まつりから全国の雪まつりへ」をキャッチフレーズとし、本州からも観光客が訪れる。

1965(昭和40)年

【第16回】

真駒内会場が正式に第二会場となる。

1972(昭和47)年

【第23回】

冬季オリンピックの開催で雪まつりが世界に知られる。第25回からは国際雪像コンクールがスタート。

第10回

第21回

第10回では大通西3~8丁目だった会場が、第21回には大通西1~10丁目まで拡大。観客数も回を重ねるごとに大幅に増えていきました。



観客で込み合う第11回会場



第11回ポスター

1979(昭和54)年

【第30回】

30回を記念して画家岡本太郎氏デザインの「雪の女神」が制作される。



第23回



オリンピックの年であったため、高さ25メートルの史上最大の雪像「ガリバーようこそ札幌へ」がオリンピック会場だった真駒内公園に制作され、選手団に歓迎の意を表しました。オリンピックの期間を通して展示したため、雪まつりが世界から注目を集めるきっかけになりました。

通常の大雪像の3倍に相当する、トラック約1,300台分の雪を使用

1983(昭和58)年

【第34回】

3番目の会場としてすすきの会場が登場。

2005(平成17)年

【第56回】

40年間続いた真駒内会場を閉鎖。翌年から2008年までさとらんど会場を開設。

第56回

巨大な滑り台で、家族連れや子供に大人気だった真駒内会場が、惜しまれながら40年の歴史に幕を下ろしました。



2009(平成21)年

【第60回】

つどーむを新第二会場に決定。